

## 第一回龍南短歌會詠草

著者	秋田，夢郷，花田，鐵太郎，藤田，?太郎，長光，純，高嶋，彪雄，本田，保章，高林，傳男，南，忠義，坂田，正義，母里，太一郎，杉，森司，高木，市之助，淺野，正一，辻，恒彦，吉田，英資，磯山，秀，太田，辨次郎，山下，茂四郎，美作，小一郎，武下，一郎，高森，眞二，佐々木，高遠，逸名
雑誌名	龍南
巻	173
ページ	115 - 118
発行年	1919-12-23
その他の言語のタイトル	第一回龍南短歌会詠草
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6934">http://hdl.handle.net/2298/6934</a>

# 第一回龍南短歌會詠草

秋田 夢 卿

哀調はただひとすぢにはもつめし音のふと絶わて

那の調ね。

淋しければ塵まびれたるハコブをり出でひけば音  
して切れぬかなしき。

逝く年の青き思ひ出日ざかりの物干台に蚊張のか  
ゝれる。

花田 鐵太郎

剃り立てのあごに残れる髭の根をまさぐりながら  
夕膳にあり。

幼くて父の亡靈怖れたるなが雨ごきは腦を病むな  
り。

赤き日影霜にかげらふ丘の家蜜柑畑にちやつちや  
は鳴けり。

藤田 徳太郎

病上り初冬の日を暖かく浴びつゝ椽に爪をつみ居り  
雲のおひゆか弱き光梧桐の葉を照らしたる淋しか  
りけり。

山も野も只ほの青くもだし居り貴き月は空に浮び  
て。

長光 純

離りゐて海を見ざれば秋の海がなつかじいかもよ  
周防の海が。

秋の陽はこれの枯野に流れたりわれの胸にもみち  
流れたり。

見れどあかぬ阿蘇のけむりの打ちなびき人思ひつ  
ゝ冬はきにけり。

高嶋 彪 雄

來らざる文をまちたり雨しきり心静まり手は痛み  
だす。

寂しさは言ふに絶へざり夕暗のかそけき流れに一  
年を傾け。

朝な朝な出逢ひし乙女秋更けて見なくなりぬあ  
わき寂寥。

本田 保章

苔蒸する野邊のみ墓をとふ人のたわて久しき秋の

夕暮。

やま里の雪にうもれし家の上にこほりて出づる冬の夜の月。

哀とてなくかあらねどわが胸にさこそひびくか虫の聲々。

高林 傳 男

吸はるごときんのひかりのきねゆけば竹むらのく  
れはうすらさむしも。

霜をりしとうがらし畑ゆむらごりは空にさびたち  
鳴きてやますも。

ここだくのごうがらしのみは霜にそみ朝毎にわが  
庭に赤しも。

南 忠 義

反省のあるよは神にちかひしも尙放浪のならひ追  
ふ我。

友さればそぞろにさびし俗事より外には語り得さ  
る我かな。

妄想のたねぬ心にさめしごと時をり道を思ふ淋し  
さ。

蠅一つ追へども去らず眞黒にいかりし後の苦笑禁

せず。

坂田 正義

刈小田の溜につどふいさゝいをのうろこの光かす  
かなるかも。

我をすてゝ友に行きける女をも恨まざりけり弱き  
我はも。

母里 太一郎

ひたぶるに火を吐く山はこの朝け紫の色にかすみ  
て居たり。

阿蘇女萱をかつぎて歸るてふその大原に火のふる  
らんか。

恐ろしく大地揺るゝ日のつづきやがて火を吐く山  
となりけり。

杉 森 司

めづらしく心おだやかな夜なりけりランプに群れ  
る虫見てありぬ。

「落第さー」さり氣なくいひし一言にもなほ涙ぐま  
しも何の心ぞ。

ごんな脊をぞやして呉れる人あらばと思ふ日の幾  
日つゞける。

高木 市之助

踏初りに汽車の窓なるほの白き小き顔を見送り  
にけり。

物思ふ心重たし積藁のかけにたゞすみ空仰ぐなり  
何鳥か知らずうたれてはたゞと夕日の前に白く  
落つるも。

淺野 正一

姉に別れあが歸りぐる丹波路よ人乏しらにかなし  
みの湧く。

露しげき丹波の秋に心弱き姉往むと思ふ思ひ得た  
へす。

天さかる丹波の姉よあひがてにあが戀ふ心せちに  
わりなく。

辻 恒彦

岩の上の白き海鳥眼をはそめたぎり流るゝ黒潮を  
きく。

庭隅にふと見出でたるしこぐさは葉を抱きかはし  
ふるべゝあたりし。

曇り日のひるのしづもり黒沼にからす下り居て久  
しく鳴かす。

吉田 英資

穩かやかへりの馬車の飼葉桶に人參のいと赤きゆ  
ぶぐれ。

ひらけたるながめなるかなびようひようと氣笛な  
らして軌道車通る。

櫛の葉はすつかり落ちてその下にたきびしながら  
芋をやさしか。

磯山 秀

秋深き夜を遠々に小太鼓のなるはかなしも旅にし  
あれば。

ぼつねんど一人居て聞く小太鼓の音なりやみてや  
みてまた鳴る。

ごーんごーん間遠の鐘に暮れなつむ夕べ鋭き百舌  
鳥の聲かな。

太田 辨次郎

新張りの障子あかるくこもらひてまひるさやかに  
百舌鳥なきしきる。

指の血のにじめる林檎唇にふればつめたや夕雨の  
秋。

おびわつゝ毒草の花にくちづけし悶ね心の小さき

たはむれ。

山下 茂四郎

田の畔に野菊はのかに匂へばか思郷の心ひたに湧くはも。

「この野菊さびしいのね」と口内に頬杖をつくわれとなりしか。

永雨する初冬の夜を密やかにかたらむ妹は遠きへにやむ。

美作 小一郎

茜さす余光の丘に一人の傷病兵の白き姿見ゆ。

傷病兵はだまりてあれど薄光る夕べの雲は眼にしむならむ。

たまさかに暗き屋内ゆ見あげたる空にしらく秋の動けり。

武下 一郎

初秋の夕映あかし白塗の出船しづかに波わくるかも。

今朝も亦牝牛河原へ牽きながら乙女はもだしうつむきゆけり。

河原邊の雜木に牝牛つなぎおきて乙女はもだして

歸りて行けり。

高森 眞二

強風にまなこをさちて眞暗の海に向へりひとり居たさに。

しらすしらす同情を求めてるな——こゝろ氣附いて強くなる心淋しい心。

酒あとの淋しき心つとよりに飾窓の鏡に見入る。

佐々木 高遠

どうでもよいことなりしかな火のごとく議論し合ひて歸り來しかど。

おとなしく弱きわが身を諦めて癒ゆる日待てば萩さきにけり。

おどけつゝふと眺めたる壁鏡淋しき私の笑顔なるかも。

逸名

ひとりみはさびしきものよとさゝやきぬ若葉の頃に戀をめし君は。

戀と云ふ只一筋の細糸によりよりて行く我は弱き子。